

日本人の自然観

1. 根底にあるもの

①寺田寅彦（日本人の自然観、寺田寅彦随筆集第5巻、1948）

「日本のように多彩にして変幻きわまりなき自然をもつ国で八百万の神々が生まれ崇拜され続けて来たのは当然のこと。」

「地震や風水の災禍が頻繁でしかも全く予測の難しい国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである。」

②西川治（日本観と自然環境－風土ロジーへの道－、2002）

「日本の農民は寒暑の別なく田畑を耕し、風水・干ばつ・氷害・河川の氾濫・海の波浪・火山灰・雑草・鳥獣・病虫害など、自然との苦闘の歴史を通して自然観を身につけた。」

「普段は慈母のように優しく、時には厳父のような自然との共生の結果、荒ぶる神を畏怖する姿勢と、和御魂（にきみたま）には甘える心がともに培われ、マナイズムとアニミズムとの共存を許す、矛盾にも寛大な精神的風土が生まれた。」

③福島要一（自然保護とは何か、時事通信社、1975）

「もともとの日本語をヤマト言葉と呼べば、ヤマト言葉に『自然』を求めても、それは見当たらない。それは、古代の日本人が『自然』を人間に対する一つの物として、対象として捉えていなかったからであろうと思う。自分に対する一つの物として、意識のうちに確立していなかった『自然』が、一つの名前を持たずに終わったのは当然ではなかろうか。」

2. 自然崇拝、自然との一体感

①野中涼（環境問題と自然保護－日本とドイツの比較、1999）

「日本人は長い間、この世界をただ主観的に、個別的に、無数の個体の集合としてとらえる傾向が強かったので、「自然」というすべてを総体的にとらえる抽象語を持たなかった。「天地山水」とか「山川草木」や「すべてあめつちの間にある事」などと呼んでいた。自然を客体化させ、それにヨーロッパ語の”Natur”や”Nature”に相当する用語としての「自然」を当てて使うようになったのは、ヨーロッパの科学文化の衝撃を受けた 1900 年前後のことである。」

②上田哲行（トンボと自然観、2004）

「カミ・ヒト・自然の三者の関係を考えてみる。西欧的（おそらくキリスト教的）世界においてカミ・ヒト・自然はそれぞれはっきりと区別される別個のものとして存在する。

一方、日本人の根底にあるとされる古神道的自然観、といっても良いものかどうか心許ないが、まあいわゆるそのような世界における三者の関係は曖昧である。」

③中谷巖（資本主義はなぜ自壊したのか－「日本」再生への提言、2008）

「日本は神国であると同時に仏国土であるがゆえに、日本では道ばたに生えている名もなき草にさえ神性があり、仏性があると信じられるようになった。それはまさに「山川草木悉皆仏性」あるいは「草木国土悉皆成仏」という言葉で表現されている。だから、森を人間の都合で伐採したりすることは罰当たりなことだとされたし、森に暮らす鳥の鳴き声、虫の音は、そのまま人間の成仏を祈るお経であると信じられた。」

3. 共生の考え方

①安田喜憲（日本文化の風土、1992）

「日本の自然観の特色は、円環的・循環的。限られた資源を有効に利用し、自然を破壊し尽くさない、自然＝人間の循環系に立脚した文明を継承、発展。対して、西欧は、自然＝人間搾取系であり、自然の側から見れば、一方的に搾取されるといった自然搾取型の文明の性格を持つ。その搾取型の地域システムの核となっているのが「家畜」。

②アジア・太平洋地域における平和と共生特別委員会報告（日本学術会議 アジア・太平洋地域における平和と共生特別委員会、1997）

「わが国ほど「共生」という言葉がさまざまな領域で用いられ、広範に流布している国はない。

地球時代は、「万物の共生」、「万人の共生」を求める時代でもある。「共生」の含意は、第一に「万物との共生」であり、エコロジカルな視点を含んでの「自然との共生」（ここに人間も自然の一つとして含まれる）である。ここではアニミズム的発想や仏教的思想も、その積極的な意味がとらえ直されよう。」